政策 21・ニュースレター

――― 市民セミナー（第２回）の報告 ―――

2024 年9月 30 日発行
特定非営利活動法人
政策 21・事務局

『日本の政策評価はどうなっているか』

１．日　時：2024 年９月 28 日（土）16:00～18:10
２．会　場：コミュニケーションギャラリー LiRiO（リリオ）２階カルチャールーム（盛岡市大通１丁目１１-８）
３．講　師：杉谷和哉氏（岩手県立大学総合政策学部講師）
「著書『日本の政策はなぜ機能しないのか？』（光文社新書）について」
山谷清志（政策 21 理事長・同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）
「著書『日本の政策評価』（晃洋書房）について」（12 月刊行予定）
４．参加者：13 人（会員・一般：９、市町議会議員：３、大学院生：１）

５．概　要

講師のお二人より、「政策評価」の状況について、日本における政策評価の歴史と現在に至る分かりやすい解説をいただきました。また、対談及び会場に参加の方々からの質問を交えて、議論を深めました。

最初に、杉谷和哉氏からは、著書執筆の動機や各章の概要の解説がありました。冒頭、現在注目されている EBPM 推進を担う経済学者らが、過去の政策評価のことを知らないのでは、また、自治体の実情を無視した方針を示しているではないか、という疑問を抱き、問題提起が必要と考えたことが示されました。第一章「EBPM の出現」では、英国及び米国における EBPM の展開。第二章「日本における政策評価」では、①プログラム評価、②業績管理／業績測定、政策評価の二つの流れ。「行政経営」という発想と「政策評価」の基準としての「効率性」。第三章「日本における EBPM」では、行政事業レビューと EBPM、政策評価の EBPM への教訓について、解説がありました。また、第四章「エビデンスを掘り下げる」、第五章「政策の合理化はなぜ難しいのか」、第六章「EBPM のこれから」では、今後に向けた問題提起と今後の政策評価の展望が示されました。

次に、山谷理事長からは、「日本の政策評価はどうなっているか」と題して、著書〔山谷（1997）『政策評価の理論とその展開』、山谷（2006）『政策評価の実践とその課題 アカウンタビリティのジレンマ』、山谷（2012）『政策評価』、山谷（2024）『日本の政策評価』〕、それぞれの時代背景と論点について、概要の解説がありました。また、それらをふまえた今後の 20 課題が示され、さらに、日本の政策評価の経緯をふまえた「宿題」として、①アカウンタビリティの<u>再構築</u>、②市民目線の評価の実践<u>数</u>を増やす、③専門領域の政策評価の<u>無理</u>を確認（例：科学技術政策≠科学技術行政）の３点が、示されました（①～③下線部分はスライドで赤字表記）。

６．参加者アンケートより

Ｑ１．杉谷氏講演について

選択肢	回答数	割合
大変良かった	3	30.0
良かった	5	50.0
どちらともいえない	1	10.0
あまり良くなかった	0	0.0
良くなかった	0	0.0
無回答	1	10.0
計	10	100.0

Ｑ２．山谷氏講演について

選択肢	回答数	割合
大変良かった	5	50.0
良かった	5	50.0
どちらともいえない	0	0.0
あまり良くなかった	0	0.0
良くなかった	0	0.0
無回答	0	0.0
計	10	100.0

Ｑ３．対談・質疑及び全体を通して

選択肢	回答数	割合
大変良かった	5	50.0
良かった	4	40.0
どちらともいえない	0	0.0
あまり良くなかった	0	0.0
良くなかった	0	0.0
無回答	1	10.0
計	10	100.0

■感想　・山谷氏の講演では、政策評価の目的が明確に述べられていて、解りやすかった。
・これまでをふりかえる内容がよかった。今後の 20 課題など山谷氏の考えが示され、非常に興味深い内容だった。
・人任せになっている情況をかえていかなければならない！　という杉谷先生のお言葉が印象に残りました。

７．市民セミナー（第３回）のご案内

10 月 12 日（土）15:00～17:10、オンラインで『市民力アップデート・改めて「評価」の可能性を問う』、山谷理事長が講師となり、第１回、第２回の内容をふまえつつ、そもそもの「評価」の意味を確認し、今後の「評価」の可能性、そこに市民が参加する意義など、「評価」のあり方や方向性を改めて展望します。